

【サンプル】

「路右^{ろう}さんが女と別れた」

その話を結城が聞いたのはつい三日前のことだ。

路右が経営しているホストクラブで働いている男が教えてくれた。

男曰く、ひと月ほど前から別れそうな雰囲気だったそうだ。

今回はどのくらい持ったか結城は記憶を辿る。たしか付き合ってた三ヶ月くらいのはずだ。

路右がやっとフリーになった。

結城は心臓がどくと大きく脈打つを感じた。自分でも驚くほど、それは明確な歓喜だった。

結城は、買い物に行くのをやめて真っ直ぐに家に帰ることにした。

路右の周囲には綺麗な女がたくさんいて、相手から寄ってくる。そのため、別れてもすぐに彼女ができてしまうのだ。

……アクションを起こすなら今夜しかない。準備をしなくては。結城は手をきつく握りしめた。

その日の夜、家に帰ってきた路右は珍しくひとりで酒を飲みはじめた。

二十一歳の結城よりも二十歳ほど年上の路右は、細身だが筋肉質で、大人な色気が漂っている。その姿に結城は息をのむ。

「……路右さん、飲み過ぎじゃない？」

路右は酒に強い方だが、今日はいつもよりも飲んでいる。目尻が少しだけ赤い。

ソファに深く沈み込み、グラスの中の氷をからからと鳴らしなが

ら、路右は遠い目をしていた。

「飲みてえ気分なんだよ」

「……なにかあった？」

結城が隣に座ると、路右はちらりと視線を寄越したが、すぐにまた酒に戻る。

なにも答えない。切れ長の目と眉間に寄った皺。

一見怒っているようにも見えるが、結城にはどこか寂しげに思えた。

「別れたんだよ」

「でもいつも彼女と別れてもやけ酒なんてしないよね」

それほど真剣に好きだったのだろうか、結城はずきりと胸が痛む。

「……お前が」

なにかを言いかけて、路右は舌打ちをした。

「え、俺がなに？」

「はあ。……お前と一緒に住んでるのがおかしいってさ」

「おかしいって……」

「普通この歳で男と一緒に住まないとかなんとか、うるさくてな」

結城は路右と同居している。

それは行き場のなかった結城のために、路右が手を差し伸ばしてくれたからだ。

「……ごめん、俺のせいで」

「ちげえよ。俺が気に食わなかったのは、俺たちのことに口を出そうとしてくることだ。勝手に決めつけて、お前を追い出させて文句言う

から喧嘩になった」

「やっぱり俺のせいじゃん」

路右のことが好きだが、自分が理由で彼女と別れてほしいわけではなかった。

結城は自分の恋が成就しなくとも、路右が幸せならいいと思っていたのだ。

「だから、ちげえって」

結城はお詫びの気持ちを込めて、路右のグラスに酒を注ぎ足す。路右は「おう」と短く言って、それを煽った。

喉仏が上下するのを、結城はじつと見つめる。

四十歳の男の、無骨で、それでいてどこか色気のある仕草。

結城はこの人の全てが好きだった。

二年前、父の暴力に耐えかねて家出をした。もうどうでもよくなつて、雨の中路地裏で蹲っていた。

路右は結城を見つけて「おい、ガキ。こんなところで寝てたら死ぬぞ」とだけ言つて、手を差し伸べてくれた。

その手が、結城の全てを変えた。

事情を聞いてくれて、ちゃんと生きていけるようにと色々と相談に乗ってくれて、家にまで住まわせてくれていたのだ。感謝してもしきれない。

結城は路右のグラスを奪い、一気に飲み干した。

「おい」

酒の勢いを借りなければ、きっと一生言えない。

「路右さん」

路右は結城の方を見つめている。鋭い目だが、その奥にある優しさを結城は知っている。

「俺じゃ、ダメですか？」

結城からグラスを奪った路右の手が止まる。そしてそのまま、グラスがソファに転がった。

「……お前」

その視線に射抜かれて、結城はもう後戻りできないことを悟った。路右はしばらく沈黙した後、低い声で言った。

「酔いすぎだ」

遠回しの拒否だ。結城はわかっていた。路右なら、大人として結城を諭すだろう。

「俺が別れた理由はお前が気に病む必要なんてねえよ」

「違う。そうじゃなくて」

結城は路右の顔に手を伸ばす。強張った頬に触れると、路右は眉をひそめた。

「おい」

結城は構わず、路右の唇に自分の唇を重ねた。

「——っ！」

酒の味がする。ほろ苦い。けれど、路右との初めてのキスだと思うと、そのほろ苦ささえ結城は愛おしくなる。

路右は一瞬固まったが、すぐに結城の肩を掴んで引き離そうとする。けれど結城は抵抗した。

必死に、路右の唇を貪る。遊び慣れた路右にとっては下手くそなキスだろう。

それでも、好きだと想いを込めて何度もキスをした。

「おい、結城」

「路右さん、お願い。一度でいいから……抱いて？」

結城の目は潤んでいた。路右は深く息を吐き、頭を掻いた。

「……お前な、俺は男だぞ。それに、お前は俺のことを兄貴みたいに思ってるんだろ。こういう悪ふざけはするもんじゃねえ」

「ふざけてなんてない」

結城は首を振った。路右のシャツの襟を掴み、縋るように見上げる。

「お願い。俺、路右さんにずっと抱かれたかったんだ。兄貴なんかじゃない。路右さんが好きなんだ」

路右はなにかを言いかけて、口を閉ざす。そして、深く重いため息

をつく。

結城は路右の反応を待たずに、震える手で路右のベルトに手を伸ばした。金属のバックルを外す。

「っ、おい！ やめろ」

路右は抵抗するが、結城は止まらない。

ジッパーを下ろし、中に手を入れる。まだ柔らかいペニスに触れた。

「くっ……」

結城はそのまま、ズボンと下着をずり下ろし、路右のペニスを口に含んだ。結城は一生懸命、舌で舐め上げる。

「は……っ」

路右の手が、結城の頭に置かれた。

押しつけるわけでもなく、離されるわけでもなく、ただ触れている。

「……くっ、結城、やめろ」

「路右さんの精液、飲ませて？」

結城が上目遣いで見上げると、路右の顔がほんのり赤くなっている。普段は余裕のある路右が、こんな表情をするなんて。

結城は愛おしさが一気に込み上げてくる。

路右は結城の髪をぐしゃりと掴み、引き離した。

「お前、変態だろ」

そう言って、結城の顎を掴み、強引にキスをした。

下手くそなキスとは違う。路右の舌が結城の口内に侵入し、歯列をなぞり、舌を絡めとる。

「んっ……あ♡」

甘い声を漏らしながら、路右にしがみついた。

「お前、後悔すんなよ。本気で抱くからな。泣いてもやめねえぞ」

「……うん、めちやくちゃにして」

路右の目が、危険な光を帯びた。結城はその目に射抜かれて、全身が熱くなる。

路右は結城のシャツを乱暴に脱がせ、そのまま結城をソファに押し倒した。逞しい体が覆いかぶさる。

路右の手が、結城の胸元に触れた。ごつごつとした指が、乳首を摘まむように撫でる。

「あっ♡」

「ここ、感じんのか？」

路右は結城の乳首を指先で転がしながら、もう片方の乳首を舌で舐め始めた。ちゅぷ、と音を立てて吸い付く。

「ああ♡ あ♡」

結城の口から、甘ったるい声が漏れる。自分でも驚くような声だった。路右は結城の乳首を舌先で弾き、軽く噛む。

「ひゃっ♡ だめっ♡」

「だめじゃねえだろ。感じてるくせに」

路右は執拗に乳首を攻め続ける。舐められ、吸われ、噛まれ、結城は体をびくびくと震わせながら喘ぐ。

「だめ、だめっ♡ そんなに舐められたら……ああああっ♡」
「うるせえ」

路右は結城の言葉を遮るように、乳首を強く吸い上げた。

ちゅぽと音を立てて離すと、結城の乳首は赤く腫れ上がっていた。

「すげえな」

路右は満足そうに笑い、結城の腕を掴むと強引に寝室へ連れていく。

そしてベッドの上に押し倒し、結城のズボンに手をかけた。すると脱がせると、結城の下半身が露わになる。

結城は既に、先走りで濡れていた。路右はそれを見て、ふっと笑う。恥ずかしくなり、結城が足を閉じようとすると力強い手で掴まれた。

「おい、足閉じるな。全部見せろ」

路右は結城の足を開かせると、後孔に手を伸ばした。指が触れた瞬間、結城は「あっ」と声を漏らした。

路右の指が結城の中に沈んでいく。中はたつぷりとローションで濡れていた。路右の指が、ぬるぬると結城の中をかき混ぜる。

「ああ♡」

「……お前、これローションか？　もしかして準備したのかよ」

「んっ♡　だって……っ、路右さんに抱かれたかったから、んうっ♡　自分でほぐして準備を……っあ♡」

結城の言葉に、路右は一瞬動きを止めた。

「……マジで変態だな」

路右は指を二本に増やす。結城の中をぐちゅぐちゅと掻き回しながら、指を曲げて前立腺を探る。

「ひう♡」

結城は声を上げ、腰を跳ねさせた。

「ここか？」

「あっ♡ ああっ♡ そこ、だめえ♡」

「わかりやすいやつだな。ここがいいんだろ？ ほら、素直に言え」

路右は結城の前立腺を指でぐりぐりと刺激する。結城は快感に頭が真っ白になりながら、必死に首を振った。

「だめ、だめえ♡」

「あ？ 嫌ならやめるぞ。してほしいならちゃんとねだれ」

「……っ、路右さん……っ、もつと……そこぐりぐりして……あああ

ああああ♡ イっちゃう♡」

「イけよ」

「あう♡ あっ♡ あああ♡ あああああああ♡」

路右が指を激しく動かすと、結城はあっけなく達してしまった。

び
ゆ
る
び
ゆ
る
と
精
液
を
撒
き
散
ら
し、
体
を
震
わ
せ
る。